

中学校社会科地理的分野における 地形学習と地域学習との相互リンクの試み

—扇状地から複合扇状地を経て伏見地域の探求へ—

香川 貴志¹⁾・山崎 貴子²⁾

The Trial for the Mutual Link of the Geomorphological Study and the Local
Study in a Junior High School Social Studies Geographical Field:
From an Alluvial Fan and Composite Fan to the Pursuit of the Fushimi Area

Takashi KAGAWA¹⁾ and Takako YAMAZAKI²⁾

抄録：本稿では、小学校社会科で既習の「身近な地域の観察」から発展させやすい項目として、地形学習と身近な地域の調査を取り上げる。地名や特産物の暗記に疲れた生徒に対して、教師の工夫次第で、「地理的なものの見方」を提供できよう。論文の中では、中学校社会科の学習指導要領や社会科地理的分野の教科書を参照する。授業実践の具体例として著者らは、2007年度に立命館中学校で実施された扇状地学習、および伏見旧市街地をフィールドにした同校の地域学習を取り上げる。

キーワード：中学校社会科地理分野、地形学習、扇状地、身近な地域の調査、エクスカージョン

I. はじめに—中学校社会科地理的分野における地形学習と身近な地域の調査の意義—

小学校社会科においては、3～5年生教科書の大半と6年生教科書の一部で地理的な学習内容が取り扱われており（文部科学省 2006）、学習期間で単純に計算すると小学校社会科の約8割が地理的内容に深く関わる事項で費やされていると云っても過言ではない。こうした経験を経た中学校新入生が最初に学習する中学校社会科の内容は地理的分野である。

小学校における社会科、とくに地理的な学習内容が苦手あるいは嫌いになる児童は、その大半が3・4年生教科書下巻の「身近な地域の都道府県内での位置づけ」にある諸項目で不案内な他地域の暗記を求められて嫌気が差し、仮にここを無事に通過しても5年生・6年生教科書で扱われる「国内他地域や外国との交流」を学ぶ箇所でも多くの暗記が要請されることに挫折する。国公立の中学受験に向かう児童が入試の必要に迫られて暗記に腐心する姿も各所で見受けられる。こうした局面では本来の地理や地理学のもつ楽しさが相当に矮小化されてしまっている。

1) 京都教育大学 2) 立命館中学校・高等学校

中学受験の有無に関わらず、小学校から中学校に入学した生徒たちは、中学 1 年生の社会科で再び地理的な内容と対面しなければならない。「地理は嫌いだ。沢山の地名や特産物を覚えなさいといけなから…」という生徒も珍しくないであろう。しかし、教員の工夫や取り組み次第では、生徒たちに再び小学校における地域学習の楽しさを思い出させ、地理に対する興味を蘇生することもできよう。そのチャンスに恵まれているのが、本稿で取り扱う地形学習と身近な地域の調査である。チャンスを逃さずに授業を展開するには、教科書や資料集の図表と写真では不十分である。加えて、これらの双方を別個に扱くと、往々にして地形学習は教科書や資料集に依存したデスクワークになり、もう一方の身近な地域の調査は時間的な制約もあって省略されてしまうことすらあると懸念される。

そこで、学習指導要領との関連を熟慮しつつ地形学習と身近な地域の調査の在り方を模索すること、およびこれら 2 項目が相互リンクされた授業設計の提案を本研究の目的とする。ここで触れる学習指導要領は、1998（平成 10）年に改訂された現行のものであるが、本研究が提案する授業設計は、2007（平成 19）年度中の改訂が目標されている新学習指導要領の骨子の一つである「小学校の教育内容を中学校で再度指導する等の工夫」（文部科学省初等中等教育局教育課程課，2007，p.5）にも寄与し得る。さらに本研究の提案は、ともすれば限定的な地域の地誌になってしまう「身近な地域の調査」の項目を、石丸（2001，p.5）の「類似点をみいだす作業は共通性を追及する一般化の方法といえ、細かな事象の分析に陥りがちな小地域を対象とする際に効果的」との提案に沿った、有効性の高い内容で満たすこともできる。

本稿で扱う対象は、2007（平成 19）年度に立命館中学校の第一学年において山崎が実践した授業内容であり、香川はその授業設計段階から助言と協力を行った。立命館中学校は高等学校から大学までの内部進学が概ね保障されている一貫教育校であり、高等学校の受験を控えた公立中学校の多くと比較すれば、授業設計面での自由度が高い。その反面、その自由度を活用した授業設計上の工夫が教員には要請されるうえ、本研究で取り扱う身近な地域の調査に関しては生徒の通学区域が広範に及ぶため、通学校区内をフィールドにした地域調査が不可能で、エクスカージョンも取り入れるならば学校所在地から近い場所を選定することが求められる。

こうしたことに配慮して、地形学習のトピックとして京都盆地を構成する扇状地、身近な地域の調査では立命館中学校・高等学校から近い伏見旧市街地を取り上げることにした。同校では従来も同じ地域でエクスカージョンを実施してきたが、2007 年度はその計画段階から積極的に上記 2 項目のリンクを図った。なぜなら、山脇（2007）が紹介したように、扇状地の伏流水が京都の伝統産業を育ててきたし、小河川の扇状地が存在することに加えて伏流水と同様の地下水が清酒醸造業の発展に寄与したことから、2 項目相互間の関連付けが有効と判断されたためである。

Ⅱ. 学習指導要領および各社教科書における当該項目 (扇状地, 身近な地域の調査) の取り扱い

1. 学習指導要領からみた取り扱い

現行の学習指導要領が実施されて以降, いわゆる「ゆとり教育」の弊害が各所で叫ばれる一方, 社会科地理的分野においては戸井田(1999)や石丸(2001)が論考の各所で触れた「地理的見方・考え方」が肯定的に受容されているようである。本稿の著者2名も「暗記科目ではない地域理解を深める科目としての地理(地理学)」の普及を不断の目標として各々の職務に励んでおり, 「地理的見方・考え方」を地理(地理学)との関わりの中のできるだけ早い段階で実践すべきであるとの意見で一致している。

文部科学省(2007a, p.16)『中学校学習指導要領(平成10年12月)』に記された, 中学校社会科地理的分野における4つの目標のうち, 「(2) 日本や世界の地域の諸事象を…(中略)…規模に応じて環境条件や人間の営みなどと関連付けて考察」や「(4) 地域調査など具体的な活動を通して地理的事象に対する関心を高め…(後略)」は, 本研究で対象とする扇状地や身近な地域の調査に深く関連するものである。とくに目標(2)に関しては, 文部科学省(2007b, p.25)『中学校学習指導要領(平成10年12月)解説—社会編—』において, 「『環境条件』を自然条件だけで説明しない」旨の解説がなされており, そこからも自然地理学的内容と人文地理学的内容を緊密に関連させることの必要性が読み取れる。他方, 目標(4)については, 文部科学省(2007b, p.30)で「景観の観察といった視覚的にとらえる活動を取り入れる」との解説が添えられている。景観の観察に好都合なエクスカージョンでは, しばしば自然地理学的内容と人文地理学的内容が併せて提示されるので, 目標(2)≒目標(4)であるとの解釈も可能であろう。

ところで, 学習指導要領における社会科地理的分野では, 4つの目標に続けて「内容」の3点が記述される。その3点は(1)「世界と日本の地域構造」, (2)「地域の規模に応じた調査」, (3)「世界と比べて見た日本」であるが, 本研究で扱う扇状地は上記の内容(1)では地域スケールからして扱い難く, 必然的に内容(2)および内容(3)における自然地理学的内容箇所に取り扱うことになる。しかし, 次節でも触れるように, 各社の教科書では, 上記の内容(3)においてのみ, 扇状地形成のメカニズムや扇状地周辺での農業的土地利用の特徴を紹介する場合が多い。

こうした事実を受けて, 内容(3)を文部科学省(2007a, p.18)で確認してみると「国内では地形, 気候などにおいて地域差がみられることを大観させる」, さらに「内容」に続く「内容の取り扱い」では「類似性や傾向性に注目してとらえ, 都道府県単位より細かな事象には深入りしない」(文部科学省2007b, p.25)との記述がある。しかしながら, 矢沢大二・戸谷洋・貝塚爽平(1971)や斉藤享治(1998)の労作を精読しても, こうした条件から大きく外れない扇状地は国内には無く, 「大観」や「深入りしない」という条件の下で, なおかつ地形図を利用しつつ生徒たちの扇状地への理解を深めるには, 自ずと教師に相応の工夫が求められる。

そこで我われは, 地形学習の一貫としての扇状地学習を, 指導要領の内容(2)「地域の規模に応じた調査」に内包することにした。身近な地域の調査に代わるエクスカージョンの実施に

先立つ授業において、扇状地形成のメカニズムや等高線や土地利用の読図演習、複合扇状地で形成された京都盆地の説明、地下水（伏流水）を活用した産業が京都盆地内に多いことの解説、その伏流水よりも深層の地下水を使った清酒醸造業が伏見で発達した事実の説明、かつて軍施設が集積した伏見の歴史、交通の要衝としての鉄道線の変遷の図示、これらを通じて文部科学省（2007b, p.25）に謳われた「『環境条件』には自然条件（自然環境）と社会的条件（社会環境）の二つが含まれている」ことを生徒たちに伝え、その理解の下に伏見旧市街地でのエクスカッションに臨んだ。クラスによってはデスクワークとフィールドワークが一部で前後することはあったが、上述した諸項目の授業内容については第Ⅲ章と第Ⅳ章で概説する。

2. 各社教科書における取り扱い

(1) 扇状地

後述する「身近な地域の調査」とは異なり、ここで扱う対象は地形学習のうちの扇状地に限られる。そこで各社教科書における索引を活用して、「扇状地」が記載されている箇所とその周辺ページを精査してみた。この結果を整理したのが表 1 である。筆者らが比較検討したのは表 1 に示す 6 社の教科書である。出版社名を伏せて表現するケースもあるが、比較検討すれば容易に判別できることでもあるので、本研究では敢えて出版社名を開示した。

表 1 各出版社の中学校社会科教科書（地理的分野）における扇状地の取り扱い

出版社(50音順)	頁数	扱いのある項目	形成場所の説明	例示河川	模式図	地形図	写真
大阪書籍 (2007)『中学社会 地理的分野』	2	(編) 世界からみた日本 (章) 世界からみた日本の地形の特色 (節) 平野と川の様子 (項) 川がつくる地形	(本文) 川が山地から平地に流れ出るところには、扇状地がつくられ、・・・ (コラム) 川が山地から平地に流れ出るときには、流れる速さが遅くなって、土を運ぶ力が弱まります。そのため、土砂がたまって、扇形をした扇状地とよばれるゆるやかな斜面の地形がつくられます。	—	×	×	×
				山梨県 京戸川	×	○	斜め 空中
教育出版 (2007)『中学社会 地理 地域に学ぶ』	3	(編) 世界からみた日本のすがた (章) 世界と日本の自然 (節) 日本列島をながめる (項) 山からの土砂が平野をつくる (資料編)	(コラム) 傾斜の急な山地の山ろくに、あらい砂利が積もって扇状地ができています。水を得にくいので果樹園が広がっています。 (キーワードの解説) 川が山地から平野に流れ出るところに、川によって運ばれた岩や石などが積もってできた地形を扇状地といいます。	富山県 黒部川 山梨県 京戸川	×	×	斜め 空中 斜め 空中
					×	×	×
東京書籍 (2007)『新編 新しい社会 地理』	2	(編) 世界から見た日本のすがた (章) さまざまな面から見た日本 (節) 世界と日本の自然環境 (項) 日本の川と平野	(本文) 山間部から平地に出た付近では扇状地が発達しているところが見られます。	山梨県 京戸川	○	○	斜め 空中
		(編) 世界から見た日本のすがた (章) さまざまな面から見た日本 (節) 世界と日本の資源と産業 (項) 日本の農業	(本文) 果樹栽培は、扇状地や台地、ゆるやかな斜面が広がるところでさかんです。	—	×	×	×

帝国書院 (2007)『社会科 中学生の地理- 世界のなかの日 本 初訂版』	4	(部) さまざまな地域の調査 (章) 身近な地域を調べよう (節) 調べる範囲を市全体に広げてみよう (項) 地形図の使い方②	(本文) [地形図上での等高線読み取り作業の一環として作業を提示]	滋賀県 百瀬川	×	○	×
		(部) さまざまな地域の調査 (章) 都道府県を調べよう (節) 特色となるものを見つけて県を調べよう (項) 自然と農業とのかかわりについて調べよう	(本文) 果樹はおもに、水はけや日あたりの良い、扇状地や山の斜面で栽培されます。	—	×	×	×
		(部) 世界と比べてみた日本 (章) さまざまな面からとらえた日本 (節) 自然環境の特色をとらえよう (項) 日本の地形の特色	(本文) 山地から運ばれてきた土砂が扇型にたまってできた地形は扇状地とよばれ、・・・ (コラム) 扇状地は水はけがよいので、ぶどうなどの果樹園として利用されています。	—	×	×	×
日本書籍新社 (2007)『わたしたちの中学社会- 地理的分野』	1	(編) くらべてみよう、世界と日本 (章) 日本の国土は、どんな特色をもっているのだろう (節) 世界と日本の平野と海岸	(本文) 川が運んできた土砂が積もってできた平野には、あらい土砂が積もった傾斜がやや大きな扇状地や・・・	—	○	×	×
日本文教出版 (2007)『中学生の社会科-世界と日本の国土』	1	(章) さまざまな日本の特色 (節) 自然から見た日本の特色 (項) 日本の地形と川・平野	(本文) 川が上流から運び出す小石や土砂がたまってできる、山地の出口の扇状地や、・・・	—	○	×	×

注1) 上表は、文部科学省検定済(2005[平成17]年3月30日付)の各出版社の中学校社会科地理的分野の教科書を参照のうえ、香川が作成した。

注2) 上表の「頁数」欄は、直接的に扇状地を説明した箇所の頁数の総計。

注3) 上表の「扱いのある項目」欄に記した編・部・章・節・項などの区分は、各出版社の呼称に依拠したが、「節」以下は香川が便宜的に呼称したのものもある。

前節で述べた学習指導要領における3つの内容を受けて、6社のうち5社が「編」ないしは「部」で3種の内容を別立てにしており、1社だけが連続して章番号を付す構成を採っている。しかし、この出版社の教科書においても、各章が学習指導要領のいずれの内容に該当するのかは簡単に分かる。

結論から記せば、全ての出版社の教科書が学習指導要領の内容(3)「世界と比べて見た日本」で扇状地を取り上げている。各社間の個性が認められるのは、表1における「形成場所の説明」以下の列に整理した諸項目である。そこで、これらの項目について各社の教科書を比較する。

まず「形成場所の説明」では、地形学的な成因については全社が触れているものの、扇状地上や扇状地周辺の土地利用の特徴については、3社が触れていない。自然環境を社会環境と関連付けて生徒に理解させるには、教員が教科書を熟読したうえで資料集を活用するなどの準備が求められる。

次に「例示河川」以下の項目についてみると、地形図と空中写真の双方を活用した出版社が3社、地形図を使わず空中写真だけで対応した出版社が1社、模式図のみで説明した出版社が2社、それぞれ数えられる。これらのうち1社は、学習指導要領の内容(2)でも扇状地を扱っており、例示地域が2つある。扇状地は3次元的に説明しなければ理解させるのが困難なため、

空中写真は全て鉛直写真ではなく斜め写真が使用されている。もちろん、地形学習は扇状地だけではないので、各社の教科書がどこに重点を置いているかの違いが、上記の相違となって現れたといえ、扇状地の扱いだけで教科書の序列が付けられるものではない。したがって、ここにおいても使用する教科書に応じた教材研究が教員にとっては必須である

なお、筆者の一人である山崎が勤務する立命館中学校は、2007（平成 19）年度に日本書籍新社の教科書を社会科地理的分野で採用している。そこで、後述するように地形図を補った授業を設計することにした。

(2) 身近な地域の調査

ここで扱う「身近な地域の調査」は、学習指導要領における内容(2)「地域の規模に応じた調査」に包含される項目の一つであるが、各社とも小学校における「身近な地域の観察」との連携を考慮に入れた教科書編集がなされている(表2)。ただ、内容(2)は全体として様々な地域スケールに対応させる必要があるため、どの地域スケールに重点を置くのかによって「身近な地域の調査」の扱いページ数に長短が生じている。したがって、ここでもページ数の多寡が教科書の序列を意味するのではない。そこで取り扱い内容を精査するために、表2の中の「地形図」以下の項目を検討する。

表2 各出版社の中学校社会科教科書(地理的分野)における「身近な地域の調査」の取り扱い

出版社(50音順)	頁数	取扱いのある項目	地図	写真	統計	グラフ	主題図	事例地域
大阪書籍 (2007)『中学社会 地理的分野』	31	(編) 地域を調べる (章) 身近な地域を調べる 1 節 地形図の見方 2 節 わたしたちの町を調べる —小牧市を例に— [コラム 大きくジャンプ] 人々の行動を図にあらわすと	1/1 万 1/2.5 万 1/5 万 1/20 万	鉛直 斜め	○	棒 円 帯	定性的線データ 定性的面データ	愛知県 小牧市
教育出版 (2007)『中学社会 地理 地域に学ぶ』	28	(編) いろいろな地域を調べよう (章) 身近な地域を調べよう	1/1 万 1/2.5 万 1/5 万 1/20 万	斜め	○	折線 円 帯 棒	定性的線データ 定性的面データ 定量的点データ (絶対図) 定量的面データ (絶対図) 定性的点データ 定量的面データ (相対図)	東京都 八王子市 (大阪府 大阪市) (高知県 馬路村)
東京書籍 (2007)『新編新しい社会 地理』	20	(編) 地域の規模に応じた調査 (章) 身近な地域の調査 1 節 身近な地域を見直そう 2 節 資料を使って見直そう 3 節 調査データを決めて見直しを立てよう 4 節 いろいろな方法で調べよう 5 節 調査結果を整理・分析してみよう 6 節 分かりやすい発表をして学び合おう [コラム 学びの広場] 「身近な地域の調査」のまとめ	1/2.5 万 1/5 万	鉛直 斜め	○	折線 棒 帯	定性的面データ 定性的点データ 定量的面データ (相対図)	石川県 金沢市

帝国書院 (2007)『社会科 中学生の地理- 世界のなかの日 本 初訂版』	16	(部) さまざまな地域の調査 (章) 身近な地域を調べよう 1 節 外へ出て調べる課題をさがしてみよう 2 節 野外調査を始めよう 3 節 調べる範囲を市全体に広げてみよう 4 節 さまざまな資料でもっと深く調べよう 5 節 調査の結果をまとめて発表しよう	1/2500 1/2.5 万 1/5 万	鉛直 斜め	○	円 帯 棒 折線	定性的線データ 定性的面データ 定性的点データ 定量的面データ (相対図)	東京都 八王子市
日本書籍新社 (2007)『わたし たちの中学社会 - 地理的分野』	17	(編) 調べてみよう, まわりの世界 (章) 身近な地域は, どんどころだろう 1 節 地形図の読み方を学ぼう 2 節 地形図を使って調べてみよう 3 節 統計・資料を使って調べよう 4 節 野外に出て調べてみよう 5 節 レポートにまとめてみよう	1/1 万 1/2.5 万 1/5 万 1/20 万	斜め	○	—	定性的点データ	東京都 調布市
日本文教出版 (2007)『中学生 の社会科 - 世界 と日本の国土』	22	(章) 身近な地域調べ 1 節 身近な地域を調べる方法 2 節 わたしたちの地域調べ 3 節 調べたことをまとめる [コラム 見て・読んで・発見する地理] 日本の地図記号は世界で通用するか	1/2.5 万 1/5 万	斜め	○	棒	定量的面データ (絶対図) 定性的面データ	茨城県 ひたち なか市

注1) 上表は、文部科学省検定済(2005〔平成17〕年3月30日付)の各出版社の中学校社会科地理的分野の教科書を参照のうえ、香川が作成した。

注2) 上表の「頁数」欄には、各編(各部)における導入部や見出し頁の数が含まれている。

注3) 上表の「扱いのある項目」欄に記した編・部・章・節・項などの区分は、各出版社の呼称に依拠したが、「節」は香川が便宜的に呼称したものもある。

注4) 上表の「主題図」欄における分類は、浮田典良・森三紀(1988)『地図表現入門—主題図作成の原理と実際—』, 大明堂, 東京, を参考にした。

まず、地形図、地勢図、空中写真についてみると、地形図では1/2.5万および1/5万が全社で掲載されており、ともに全国をカバーする地形図である片鱗がうかがえる。より大縮尺の1/1万を掲載しているのは3社で、この全てが地形図の縮尺に関する学習と関連させながら記述を展開している。ただし、後述する事例地域と同一の場所で地図の縮尺に言及しているのは、3社のうちの1社だけである。1/20万地勢図を掲載しているのが全て1/1万地形図を掲載している出版社と同一であるのは、こうした縮尺に関する記述の多寡に依存していよう。

次に、空中写真についてみると、親しみやすい斜め空中写真が全社で掲載され、地図との照合を図るのに便利な鉛直空中写真も3社で掲載されている。鉛直空中写真を掲載している3社は、これを全て後述する事例地域の1/2.5万地形図と対照させながら使用しており、うち1社では地形図と鉛直空中写真がともに新旧並置で編集されている。

続けて、統計、グラフ、主題図について比較検討する。ここは、各社間の相違が鮮明に出ている。扱われるグラフの種類は、全く事例が無いものから4種類まで多様である。また、例示される主題図の種類も、概ねグラフの種類に呼応するかのよう、最小の1種類から最多の6種類までである。ただ、これは項目としての「身近な地域の調査」に限定した場合の相違であり、当項目を包含する学習指導要領の内容(2)「地域の規模に応じた調査」をトータルでみれば、その違いはより小さなものになるう。

この項の最後に、例示地域について若干の考察を試みる。小学校の社会科教科書が横浜市、

神戸市、福岡市などの政令指定都市や広域中心都市を積極的に取り上げているのに対し、中学校社会科の地理的分野の教科書では、事例地域がより人口規模の小さな都市に設定されている。そして、それらの多くが大都市の郊外に位置する都市であり、唯一それに該当しない金沢市も行政域が広く郊外の様相を呈する地域が市内に広く展開しており、事例地域は都市化の前線が各所に存在する（あるいは存在した）地域であると断定できる。おそらく多くの中学校では、学校周辺を事例とした教育活動が行われているであろうし、教科書で扱われる事例地域は地域変化が顕著に見られる典型例として選定されたのであろう。

あらゆる中学校で採用される教科書は、様々な環境条件（文部科学省（2007b, p.25）の解説文を借りれば、「自然的条件（自然環境）とそれ以外の社会的条件（社会環境）」の下で活用されるものであり、行政域の大半が市街地であったり農山村的であったりする地域は事例とするのには不適切である。加えて、各自治体の教育委員会などが作成する副読本も小学校を対象にしたものほどには整備されていない。このような諸条件を考慮すれば、各社教科書の事例地域は、アーバンとルーラルの双方の要素を含んでいる点で評価できる。しかし、生徒たちの興味を一層喚起するには、教師が学校周辺での調査やエクスカージョンを企画し、事例地域はあくまで雛形とすることが穏当であろう。その際、地方自治体が集計した統計類は有用であるが、生徒が収集するには荷が重いので、教員が予め整えておく必要がある。

Ⅲ 扇状地に関する授業設計と授業実践

既に述べたように、地形学習における扇状地を扱うことで、次章で述べる地域学習との相乗効果が期待できる。設定時間は1時間だけであるため、本章では扇状地に関する授業設計と授業実践の各々について、節を分けて整理する。

1. 授業設計の概要

ここでは、指導案やワークシート設計についての工夫や留意点などについて、その過程や授業の狙いを紹介する。

学習内容は、作業と考察を組み合わせた。事例地域は、滋賀県高島市の百瀬川扇状地とした。この扇状地は、表1に示したように教科書でも取り上げる出版社があり、参考書や作業ワーク集などでも扇状地の典型として例示されることが多い。ただし、扇状地上の土地利用に関しては、次節で述べるように典型例から外れる部分もある。地形図（図1）を活用した作業を列挙すると次のようになる。

①百瀬川を青色の色鉛筆でなぞる、②100～150mの等高線を10mごとに全て茶色でなぞる、③扇状地の断面図を描く（図1のX-Y）、④土地利用を色分けし（広葉樹林：緑色、果樹園：オレンジ色、畑：黄緑色、水田：黄色、集落：ピンク色）、扇頂・扇央・扇端（各々、図1のA・B・C）における土地利用の特色を探る。

考察では、ワークシートを活用する。まず、穴埋め形式で、扇状地の定義と各部分の地形名称、および土地利用を把握させる。そして、水が湧き出すことに関わる地名を探させ、扇状地と人びとの生活を結びつけるようにする。また、土地利用に関わる地図記号から、現在の扇央

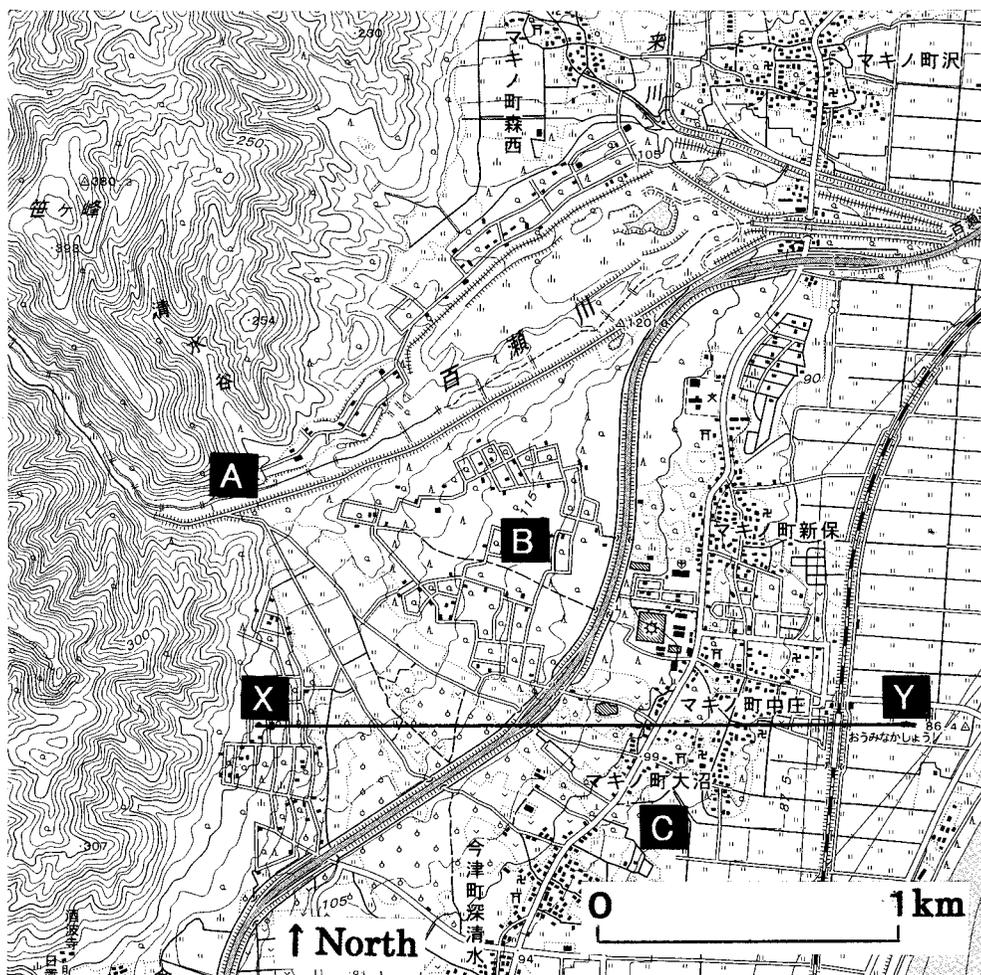


図1 ワークシートに組み込んだ百瀬川扇状地の地形図
1/25,000「海津」(2007(平成19)年発行)を本誌の掲載可能欄に合わせて縮尺調整。

における土地利用を読み取り、そうした土地利用がなされるに至った理由を考えさせる。

こうした作業を一通り終えたところで、京都市の1/2.5万集成図を示し、京都盆地を流れる河川、およびその周辺の地形に注目させる。そして、京都盆地が多くの河川によって形成された複合扇状地であり、伏見はその末端部より下流側にあることを説明する。こうした説明を経れば、扇央～扇端付近における豊富な地下水・湧水と京豆腐・清酒などの食品工業との関係を理解させ、次章で扱う地域学習へと滑らかに繋げていくことが可能になる。

2. 授業実践の概要

本節では、授業実践の概要について記述し、実践に際して難しい箇所、実践の経験から反省・改善の必要な箇所などを紹介し、更に優れた授業を展開するための素材とする。

作業について述べると、等高線をなぞる作業で苦心している生徒が目立った。配布資料が白黒印刷であったことや、一部に補助曲線が描かれていて混乱を誘発したと考えられる。こうした生徒に対しては、机間巡視をする際に教員のノートを示しながら個別説明を施した。改善方策としては、配布資料のカラー印刷化、補助線やポイントを添えておくなどの工夫が考えられる。また、イメージをつかませるために地形図の一部分をA2サイズに拡大して教壇で提示したが、教室内の生徒全体からは見難いとの反応があったため、模造紙2枚分に拡大するなどの改善が必要であろう。モニターの活用も考えられるが、等高線が読み取り難いことには留意しておかねばなるまい。

ところで、百瀬川扇状地は、扇頂～扇央でも一部に水田が見られるなど、典型的な扇状地の土地利用とは異なる部分もある。このことについては、後に現地調査に赴いて景観写真を撮影して授業でも取り上げた。現地調査では、果樹園で栽培されている果実の種類、住宅開発が主にリゾート型の別荘地になっている状況などを把握し得たし、扇央部の一部が水田になっていることについては扇頂部より更に上流側に農業用水の取水口や分水施設を確認できた。こうした成果については、次年度以降の扇状地学習の折に積極的に盛り込んで、授業改善に役立てていきたい。

Ⅳ 地域学習に関する授業設計と授業実践

ここでは、前章で扱った扇状地や伏流水に加えて、伏見の地域学習に欠かすことのできない(1) 軍との関係、(2) 鉄道線の変遷、(3) 酒造業の立地基盤、これらの3点を盛り込んで授業設計と授業実践に臨んだ。そして、これらの事項が相互に関連していることにも随所で触れて、地域学習の面白さに気付かせるよう努めた。以下、授業の概要について記述するが、教室では年号を詳しく覚える必要はないことを伝えたい。前後関係を明確にするため、必要に応じて年号を添えた。ただし、本稿では紙幅の都合もあり、微細な事項までの記載は避ける。詳細な授業内容に関しては稿を改めたい。なお、授業の設定時間は2時間であるため、本章では授業設計と授業実践とを別立てにせず、取り扱い内容ごとに記述した。

1. 軍との関係

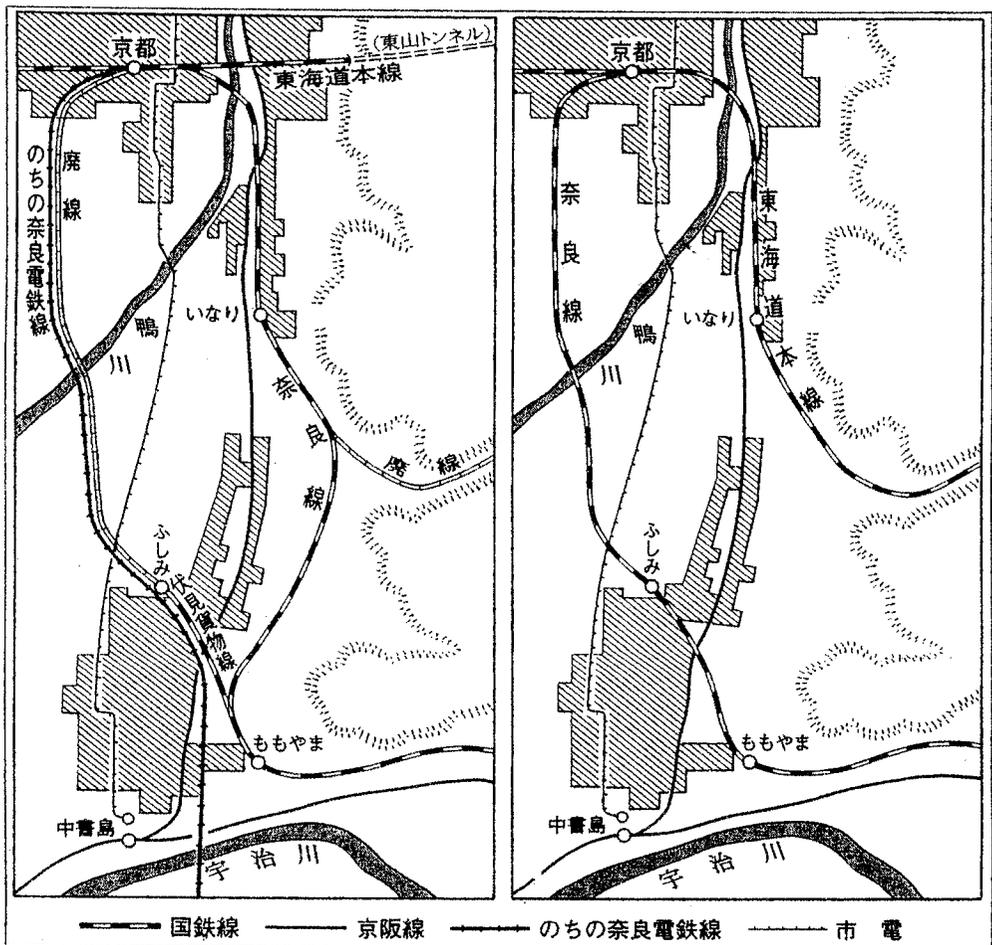
伏見、特に伏見区北部の深草の地には、第二次世界大戦終結時まで、日本軍関係の施設が集積していた。その主なものを列挙すると、陸軍第16師団司令部(現・聖母学院本館)、京都衛戍病院(現・京都医療センター)、歩兵第9聯隊(現・京都教育大学)など多数の施設がおかれ、軍都としての繁栄をみた。戦後、これら軍用地は、個々の用地が広い国有地であったことにより、学校や病院などの公共性が高く広い用地を必要とする団体に払い下げられていった。付近には第1軍道～第3軍道や師団街道といった往時の地名が現存しており、かつて軍の施設があったことを伝える記念碑も各所に見出すことができる。生徒たちは少なからず、このように風変わりな地名に記憶があるため、地名に織り込まれた歴史を読み取ることの楽しさに至れる。また、新旧地形図(図2・図3)の対比で色鉛筆を使った簡単な着色作業を命じたが、それは旧軍施設と現施設との照合を図るためである。また、旧版地形図に描かれた軍施設の地図記号に触れることによって、記号の種類や標記の推移について展開することができた。



図2 伏見地域の現在の地形図
1/25,000「京都東南部」(2006(平成18)年発行)を本誌の掲載可能欄に合わせて縮尺調整。

2. 鉄道線の変遷

立命館中学校から至近の地をJR奈良線が南北方向に通じている。そこで、学校から最寄りの稲荷駅がかつて東海道本線の一部であったことを示し(図4)、生徒の関心を引き込むよう工夫した。このような導入を図ると、京都～JR藤森の複線化に際して、東海道本線時代の軌道敷を活用できたこと、さらに名神高速道路が旧東海道本線の軌道跡で稲荷・桃山丘陵の鞍部を越え山科盆地に通じていることなどを同時に説明できる。また、図4を参照すれば、現在の近鉄京都線の前身が鉄道省の奈良線であることが分かる。そして、現在の桃山駅～近鉄伏見駅に認められる伏見貨物線が清酒の搬出に使われていたことを解説すれば、次節で触れる酒造業にも関連付けることができる。



1921年8月1日～1928年9月2日までの国鉄路線図

1921年までの国鉄路線図

図4 伏見における鉄道線の変遷

田中・宇田・西藤(1998)のp.319より転載。ただし「国鉄路線図」と記したキャプションが原書では入れ替わっているため、ここでは正しいキャプションに修正した。

鉄道線に着目すれば、前節で触れた軍との関係にもフィードバックすることができる。例えば、近鉄京都線の桃山御陵前駅の南側では、戦前から鉄道は高架敷設されていた。これには、地上での軍事演習の妨げにならないよう軍が鉄道を地下化しようと企てたところ、地下化によって伏流する地下水の水脈が断たれることを嫌った酒造業者が反対し、地下水への影響が相対的に少ない高架化へ設計変更させるに至ったという経緯がある（田中ほか 1998, pp.313-330）。さらに同線を南に下ると、宇治川を跨ぐ澱川橋梁がある。中間に橋脚が無いこの長大なトラス橋も河川敷や河川を利用した軍事演習の妨げにならないよう工夫されたものである（田中ほか 1998, pp.313-330）。このように、鉄道線を媒介にすれば、地形や環境（扇状地性の地形・地質を伏流する地下水）、伏見の経済活動を支えた軍や酒造業の全てを効果的に関連付けられる。

3. 酒造業の立地基盤

前節で触れたとおり、伏見酒造業は地下水に依存している。かつては京都盆地を形成する複合扇状地の伏流水を活用していたが、昨今は数十メートルの深さの透水層からの地下水に依存しているようである。しかし、土木・工業技術が現在ほどに発達していない近世・近代から伏見の酒造業を認めることが出来るので、その草創期に複合扇状地が育んだ伏流水を原料水としていたことに疑いを挟む余地は無い。そこで、今日の深層地下水の話題を盛り込むことでの混乱を避けるため、授業では当初の伏見酒造業の原料水が複合扇状地の伏流水であったとの理解をさせた。事実、かつて「伏見」は「伏水」と記される地名であった。もっとも、現代産業としての酒造業の立地要因を一層追及していくならば、今日では汚染度が低い深層地下水がもっぱら利用されていることに触れておく必要がある。

今年度は時間的な制約もあって深層地下水までの説明に至れなかったが、次節で述べるエクスカーションで目にする大倉記念館などの産業博物館による地域振興策の説明と併せて、地域学習一層の進化を図るために次年度以降の課題としたい。また、京都盆地が複合扇状地であることに関しては、植村・香川（2007）による『京都地図巻』裏表紙の見返しに優れた等高線図が掲載されている。今年度の授業準備の段階では同書が印刷の最終段階前で活用できなかったが、この図についても次年度以降に参考資料として配布すれば、生徒たちの学習効果を飛躍的に高めることができよう。

4. 事前学習後の生徒たちの反応

上述の第1節～第3節は、事前学習で扱った内容をまとめたものである。こうした授業実践を通じて得られた成果を生徒たちに課したレポートの内容から読み取ってみる。

まず、多くの生徒のレポートにおいて伏見の歴史について多様な知識を得たことが記述されている。具体的に記すと、伏見が軍都であったこと、鉄道高架化が事業に際して軍と酒造業者との対立があったことなどである。加えて、これらの多くが現存しており、今日においても歴史を紐解く素材になることにも関心が寄せられている。こうしたことから、後日実施するエクスカーションへの期待を示す生徒も少なからずいた。

作業については、地形図上での着色作業や新旧比較に関して、地域理解の手助けになったと

の評価が得られた。旧版地形図は、現行地形図との比較において、複写の際の縮尺調整作業などで教員に負担がかかるものの、こうした反応が得られることを鑑みると、教育実践で積極的に取り入れていく価値があろう。

5. エクスカーションの概要

立命館中学校では、地域調査の一環として初歩的な地域理解を図るため、例年6月に中学1年生を対象とした伏見巡検を行っている。2007（平成19）年度は6月23日（土）に実施した。これは学校のある身近な地域を実際に歩き、その地域がもつ特色を観察することを通じて、個別地域への理解や関心の糸口をつかませることが目的である。同時に、現地観察を班単位で行うことによって、入学してからの日数が浅い生徒たちの相互親睦を図るというメリットも期待できる。フィールドにおける具体的な活動としては、チェックポイントを指定された順序で巡り、与えられた課題をこなしながら伏見地域の特色を理解していくというものである。

チェックポイントは毎年入れ替えるが、2007（平成19）年度は、御香宮（桃山地域の氏神）、料亭・魚三樓（鳥羽・伏見の戦いの折の弾痕が残る）、伏見銀座跡（東京の銀座よりも古い）、四つ辻の四つあたり（城下町伏見の面影を残す遠見遮断）、寺田屋（坂本竜馬ゆかりの旅籠）、大倉記念館（「月桂冠」による清酒醸造の産業博物館）である。フィールドは建造物が密集した市街化であるため地形学的な説明は難しいものの、桃山丘陵から西方向に緩傾斜した地形を体感した後大倉記念館の展示を見れば、この地における地形・地下水との関わりが理解できる。また、近鉄京都線の桃山御陵駅付近では、事前学習で既習の鉄道高架事業（本章第2節参照）を目の当たりにすることもできる。

V 高等教育における地理学教育と初等中等教育における 地理教育との関係改善の模索 —むすびにかえて—

以上のように本研究では、扇状地を地形学習の一つとしてとらえ、それと「身近な地域の調査」を関連付けて授業で提示すべく、学習指導要領との整合性を図りながらの授業設計、そしてそれに基づく授業実践の一例を提示した。本研究で対象とした立命館中学校において今年度の「身近な地域の調査」に関してみると、教員が作成した新旧地形図を活用した授業、およびそれを受けてのエクスカーションで代替しており、統計データからグラフや地図を作成する学習は、国や地方スケールでの統計処理に依存しているのが実情である。系列大学への進学が概ね保障されている中高一貫校では、中学校の社会科地理的分野と高等学校の地理歴史科「地理」との連携を一層緊密化し、その特性に合わせた「暗記科目ではない地域理解を深める科目としての地理」の魅力を生徒たちに伝達していかなければならない。

他方、高等学校の受験を控えた大多数の中学校では、高等学校の入学試験で暗記的な要素が排除しきれない（これについては、ある程度は基礎的事項の暗記が必要であると著者2名は考えている）以上、教員は暗記事項を削減した授業設計に大きな不安を抱かざるを得ない。しかし、覚えるべき事柄の大半は、その存在自体が何らかの意味や法則性に則っており、教員は不

断の努力でそれを追究・咀嚼のうえ教室で提示し、生徒が「役立つ地理」を効率的に学べる技法の伝授に努めなければならない。

中学校だけにとどまらず、その前後の小学校や高等学校をも含め、児童・生徒と向き合う教員の能力や資質の向上には、大学での学生指導や卒業・修了後の助言で大学教員の果たす役割があまりにも大きい。しかしながら、教育学部において例えるならば、このようなサポートが教科教育担当教員に過分にかかり、教科内容担当教員からは相対的に浅薄なサポートに留まっているという自省をせざるを得ない。さらに、教員養成を主目的としない学部では、こうした傾向が一層顕著であることも強く懸念される。現在進められている学習指導要領の見直しにおいて、高等学校の地理歴史科で世界史だけが必修科目として存続しそうな状況（文部科学省初等中等教育局教育課程課 2007, p.4）を鑑みると、地理教育実践のサポートを十分に果たして来なかった大学教員の怠慢をもちや否定することはできまい。中学校社会科や地理歴史科の教育職員免許が取得できると謳いながら地理学を専門とする専任教員の居ない大学、地理学を専門とする数名の専任教員を擁しながら入学試験の地理歴史科で入試教科としての地理を準備できない大学、こうした状況の改善を早急に講じなければならない。それと同時に、高等教育の研究者養成に特化していない多くの大学における地理学を専門とする教員は、所属先の少なからぬ卒業生が初等中等教育に携わる教員となる大学である限り、彼ら彼女らとの相互補完関係を従来に増して大切にしていける必要がある。

付 記

本研究は、立命館中学校で社会科の地理的分野と歴史的分野を担当する山崎の授業設計において、香川が地理的分野で相談を受けて助言をする機会が多いことから、環境教育に関連が深い項目を厳選してまとめたものである。本稿の執筆に際しては、香川が抄録～第二章、第V章と全体調整を担当し、山崎が第三章と第四章を担当した。第V章の要望や自己批判の文責は全て香川にある。

文 献

- 石丸哲史（2001）「新学習指導要領に向けた地理教育の視点—中学校社会科・地理的分野の授業展開—」、福岡教育大学紀要 50, 第2分冊, pp.1-10.
- 植村善博・香川貴志（2007）『京都地図絵巻』, 古今書院, 東京.
- 浮田典良・森三紀（1988）『地図表現入門—主題図作成の原理と実際—』, 大明堂, 東京.
- 斉藤享治（1998）『大学テキスト 日本の扇状地』, 古今書院, 東京.
- 田中真人・宇田正・西藤二郎（1998）『京都滋賀 鉄道の歴史』, 京都新聞社, 京都.
- 戸井田克己（1999）「地理的見方・考え方の基礎的考察」（井上征造他編『新しい地理授業のすすめ方』所収）, 古今書院, 東京, pp.8-23.
- 文部科学省（2006）『小学校学習指導要領（平成10年12月）』, 国立印刷局, 東京.
- 文部科学省（2007a）『中学校学習指導要領（平成10年12月）』（平成19年3月改正版）, 国立印刷局, 東京.
- 文部科学省（2007b）『中学校学習指導要領（平成10年12月）解説—社会編—』, 大阪書籍, 大阪.
- 文部科学省初等中等教育局教育課程課（2007）『中央教育審議会教育課程部会「教育課程部会におけるこ

れまでの審議のまとめ』(リーフレット), 文部科学省, 東京.

矢沢大二・戸谷 洋・貝塚爽平(1971)『扇状地—地域的特性—』, 古今書院, 東京.

山脇正資(2007)「水とつながる多様な産業」(植村善博・香川貴志編『京都地図絵巻』所収), 古今書院, 東京, pp.120-121.

*各出版社の教科書については, 表1および表2に記載しているので, 当文献欄では省略する。

